

アイルランド国教会と改宗運動

——言語をめぐる問題を中心に——

小村 志保

ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 日本名小泉八雲、1850-1904) はギリシャで生を受けた後、幼少期を父方の家族があったアイルランドの首都ダブリンで過ごした。この父方の家族ハーン家は、アイルランド史研究にとって興味深い存在であり、私はこれまでハーン家に関する新たな史料の発見をし、ハーン家の先祖と信じられてきた人物が架空の人物であったことなどを明らかにしてきた⁽¹⁾。その過程で、アイルランドにおけるハーン家の歴史において遡ることのできる最も古い人物で、ラフカディオの四代前の先祖にあたるダニエル・ハーン (Daniel Hearn, 1693-1766) とその義弟であるウィリアム・ヘンリー (William Henry, ?-1768) が、アイルランド史研究においても重要な意味を持つ活動にかかわっていたことがわかった。英国

アイルランド国教会と改宗運動

国教会のアイルランドにおける組織、アイルランド国教会 (Church of Ireland) の聖職者であった両者は、アイルランド国民の大多数を占めるカトリック教徒の国教会への改宗を目指した「チャーター・スクール」運動に参加していたのだ⁽²⁾。本稿では「アイルランド人を改宗させるための最も長続きした試み⁽³⁾」とされるこの「チャーター・スクール」運動をきっかけに、アイルランドにおける改宗運動、特に言語をめぐる問題について考察したい。

アイルランド国教会は一五三七年、イングランド王のヘンリー八世とその後継者がアイルランドにおける教会の最高位を占めることを宣言した法律がアイルランド議会によって制定されて以降⁽⁴⁾、一八六九年に非国教化が決定されるまで国教とされていた。その信徒は主に十六世紀後半以降に

行われたイングランドによる計画的な植民に伴う入植者やその子孫、または政治や行政、軍事等を担うためにアイルランドに居住していたイングランド人で、アイルランド史研究ではニュー・イングリッシュと呼ばれる人々である⁽⁵⁾。

しかし国民の大多数は十六世紀から十七世紀にかけての激動を経てカトリック教徒のままであり、使用する言語も英語ではなくアイルランド語であった。それはアイルランド人だけでなく、オールド・イングリッシュと呼ばれる十二世紀後半から宗教改革の時期までにアイルランドへ移住したカトリック教徒のイングランド人とその子孫たちも同じであった。オールド・イングリッシュは初め、自分たちはイングランド人であり、アイルランドにおけるイングランドの利益を代表する者であるとしてアイルランド人とは別の集団を作っていたものの、次第に交流または同化が進むこととなった⁽⁶⁾。そのため彼らも言葉だけでなくアイルランド式の衣服や習慣をも使用するようになっており、宗教改革の時期には都市部を除いて国のほぼ全域でアイルランド語のみが使用される状況にあった⁽⁷⁾。

アイルランド語の使用は一三六六年に発令された三十六条のキルケニー法令によってオールド・イングリッシュの居住地では禁止されており、こうした地域では英国式の言語や名前の使用、馬の乗り方をするなどが求められ

ていた。しかし一四九五年にこの法令を再承認する法律が可決されたことからわかるように英語が浸透することはなく、ヘンリー八世期にも「アイルランド語の根絶」の施政方針が継続されたにもかかわらず、国民の言語はアイルランド語であり続けた⁽⁸⁾。さらにアイルランド議会は一五三七年、「教育や宗教など様々な手段を用いて英語を普及させる」ための法令を通過させ、「神の言葉は英語によって説かれなければならない」としている⁽⁹⁾。ところがこの法令を通過させたまさにその議会にもアイルランド語を話す議員が含まれており、この五年後にヘンリー八世をアイルランド国王と宣言した議会でも、その法案は議会両院においてアイルランド語で読み上げられ、有力なオールド・イングリッシュ一族の出身であるオーモンド伯が通訳を担当していたのだ⁽¹⁰⁾。その後エリザベス一世はアイルランド語に関する方針を転換して聖書をアイルランド語に翻訳して出版することを決め、そのための活字版と印刷機の準備に資金を与えた。しかしこの計画は遅々として進まず、アイルランド国内で初となるアイルランド語の印刷物となったプロテスタントの教義問答集が出版されたのが一五七一年、新約聖書が出版されたのがさらに三十年以上も経た一六〇二年から翌年にかけてとなり、その前文には出版の遅れのために「何千もの魂が失われてしまった」と記されている⁽¹¹⁾。

このように十六世紀後半のアイerland統治の方針には「組織的に宗教弾圧を行う能力も意志も」なく、そのため「民衆の宗教的な習慣はそれまでと変わらなかつた」と考えられており、一五九〇年までにはアイerlandでの宗教改革は既に失敗していたとの指摘もある⁽¹³⁾。

この新約聖書は一六八一年に第二版が出版され、続いて一六八五年には旧約聖書のアイerland語訳が出版された。旧約聖書は国教会の主教だったウィリアム・ベデル（またはビートル）(William Bedell, 1571-1642) がアイerland人の協力を得て生前に翻訳していたものを科学者のロバート・ボイル (Robert Boyle, 1627-91) が出版したもので、ボイルは新約聖書の第二版の出版も担っていた⁽¹⁴⁾。ボイルの父はコーク州を中心としてマンスター地方に広大な土地を短期間で手に入れ、初代のコーク伯となっていたリチャード・ボイル (Richard Boyle, 1566-1643) と、ニュー・イングリッシュとしてアイerlandへ渡った者のうち最も成功したとされる人物である⁽¹⁵⁾。しかしこのロバート・ボイルによる二つの出版物にもほとんど需要がなく、最終的にはスコットランドのゲール語圏へ渡ったとされる⁽¹⁶⁾。

十七世紀には数度の戦乱とその鎮圧によってニュー・イングリッシュがさらに流入し、一六九〇年から翌年にかけて起きたトリックのジェームズ二世軍とプロテスタントの

ウィリアム三世軍との戦いがウィリアム軍の勝利に終わったことでプロテスタントの優位が決定的となる⁽¹⁹⁾。その後アイerland議会議会によって一六九五年以降カトリック教徒に対する刑法が断続的に制定され、これによりカトリック教徒が教育を受けること、武器を所有すること、司法職に就くこと、中央・地方政府で職に就くこと、軍への入隊などが禁止されたが、そのうち最も重要な意味を持つと考えられているのは一七〇四年の法である。この法ではカトリック教徒が「土地を購入すること」「プロテスタント教徒から土地を相続すること」が禁止され、「土地の貸与は最長三十二年とすること」「土地を相続する場合は男子全員に平等に分割すること」が求められた⁽²⁰⁾。これによりこの時期にまだある程度以上の規模の土地を所有していたオールディングリッシュを中心とした有力なカトリック教徒の一族のなかには、家族の一部だけが国教会に改宗する場合も少なくなく、十八世紀後半までにはカトリック教徒の土地所有率は全土の五パーセント程度に低下したと推定されている⁽²¹⁾。しかし一方で土地などの財産を持たない大多数の国民には影響を及ぼさず、改宗は進まなかつた⁽²²⁾。そのため一七三二年から翌年に行われた暖炉税徴収のための調査の結果では、プロテスタント教徒が全土に占める割合は多くとも二割程度とされており、また一七三一年にアイerland上

院議会の命令によって行われた調査によれば、カトリック教徒が国内全域で数的多数を維持しているばかりか、カトリック教会や学校と認められる建物も多数存在し、神父たちは「控えめな態度もほとんど無く」どんな場所でも姿が確認され、信徒たちも「プロテスタント教徒と同じように公然と教会へ行く」と報告されている。⁽²⁴⁾

このようにヘンリー八世期以降の約二世紀間のイギリスによるアイルランド統治において、カトリック教徒を国教会に改宗させるための一貫した方針があったとは言えないわけだが、その役割の一端を担うべきアイルランド国教会はこの問題に対してどのような態度をとっていたのだろうか。結論から言えば、改宗問題の解決のために効果的な方策が実行されることはどの時代においてもなかったのであった。その原因は刑罰法が「都合の良い言い訳」となったことその他に、「エリザベスの時代以降ずっと布教活動を停滞させてきた古い問題」にもあった。それは「原住民の改宗は英語、英国式の風習、そして勤労の習慣を身に付けさせた後に行われるべきか、その前に行われるべきか」⁽²⁵⁾という問題である。アイルランド人への否定的なイメージは、古くは十二世紀後半のウェールズのジェラルド (Gerald of Wales/Giraldus Cambrensis, 1146-1223) にまで遡る。ジェラルドによればアイルランド人は「あまりにも野蛮で

文化を持っておらず」、初期の入植者たちがアイルランド語を話すなど同化しつつあるのは「背信的な」アイルランド人との「有害な接触によって墮落」したためであり、このような考え方はニュー・イングリッシュのアイルランド人観にも強い影響を与えていた。⁽²⁶⁾ マンスター地方の植民で自身も広大な土地を得たニュー・イングリッシュを代表する作家エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser, c.1552-89) もオールド・イングリッシュを批判する文章の中で、「イングランド人がアイルランド語を話すこと」が「他の多くの害悪の根源」で「あの言語に慣れることをむしる軽蔑すべきであるはずなのに、イングランド人が自分の言語よりもあの言語を話すことにより喜びを感じるののは奇妙なことである。というのも征服された者の言語を嫌悪し、征服された者に征服者の言語を学ばせること」⁽²⁷⁾がローマ時代からの「征服者の習慣」だからだとしている。しかし一方でプロテスタントの教義において「その土地の言語による聖書が入手でき」「聖書を直接読んで自分の心を決めることは個人にとって不可欠な要件」であるため、⁽²⁸⁾ 言語をめぐる問題は国教会が常に直面する課題であった。「アイルランド語で改宗運動をする必要」と「英国化してカトリック教を根絶する必要」という矛盾が⁽²⁹⁾ 国教会の聖職者をいかに悩ませていたかは、先に述べたロバート・ボイルによるア

イルランド語版聖書の出版をめぐる状況にも示されている。この当時ミーズ教区の主教だったアンソニー・ドッピング (Anthony Dopping, 1643-97) は当初ボイルの計画を支援したが、後に「英語の使用を普及させるという方針に反する」としてその支援を取り下げた。その後一六九〇年代になってドッピングはイルランド語による伝道と出版を再び計画したが、ボイルの時と同じ理由から断念している。⁽³⁰⁾

このような状況においてイルランド語による布教を唱えたのは、先に触れたイルランド語版の聖書の翻訳にかかわったウィリアム・ベデルである。ベデルはイングラッド生まれの聖職者で一六二七年にイルランドに渡り、この年から一六二九年までトリニティ・カレッジ・ダブリンの学長の職に就いていた。トリニティは一五九二年の創立以降プロテスタント教徒のみが入学を許される事実上ニュー・イングリッシュの子息のための教育機関で、イルランド国教会で下位の聖職に就く者のほとんどが教育を受けていたが、設立の目的にはイルランド語のできる聖職者を養成することも含まれていた。トリニティに着任するとまもなくベデルはそれまで知識のなかったイルランド語に関心を示し、「イルランド語での伝道、教義問答、教育の重要性」を表明してイルランド語版の教義問答集を作成した。⁽³¹⁾ またトリニティにおいてイルランド語での講義を

行うことや、学内の礼拝堂で祝日にはイルランド語での祈りを捧げることも命じた。⁽³²⁾ 学長を退いてからも自らの教区でイルランド語での布教を試みている。しかしベデルは国教会ではまったく異色の存在であり、トリニティでのイルランド語の使用も一六三四年頃には行われなくなった。⁽³³⁾ 再びイルランド語による布教運動の気運が盛り上がるのは半世紀程後のことであり、ボイルによる聖書の出版もこの時期のことであった。トリニティでのイルランド語の使用もこの頃再開されており、さらに十八世紀に入ると国教会では一七〇三年から翌年にかけてと一七〇九年に開かれた下位聖職者で構成される主教会議において伝道と基礎的な宗教的書物の出版をイルランド語で行うことを求める決議がなされた。この時期の聖職者で特筆すべきなのはキャバン州の教区司祭であったジョン・リチャードソン (John Richardson, 1667-1747) である。リチャードソンは自らイルランド語で説教を行うのみならず、ボイルの使用したイルランド語の活字版を購入して一七一一年には説教集、翌年には共通祈祷文をそれぞれイルランド語で出版した。同時に「イルランド語による指導が改宗を実現する唯一の方法」なので「イルランド語のできる聖職者を原住民の居住地に赴任させ」「イルランド語のできる教師がいる学校を作るべき」で、これはイルラ

ンドで一年間「四つの連隊を駐留させるか、戦争をする」費用でまかなえるとする提案も出版する。⁽³⁴⁾このリチャードソンの活動に協力していたのはカハル・オ・リニーン (Cathal Ó Luinín/Charles Lynegar, fl. 1708-31) であった。オ・リニーン家はファーマナー州で代々豪族に仕える年代史家の一族だが、祖父の世代に改宗して年代史家としての地位を維持していた。オ・リニーンは、一七〇八年から約二十年間トリニティの神学部でアイルランド語の講義を担当している。この講義の目的は当然アイルランド語のできる聖職者を養成することにあつたが、オ・リニーンの名前は大学の正式な記録には掲載されておらず、また給与も大学からは支払われず賛同者の寄付金によるものであった。またオ・リニーンが退いてからはトリニティでのアイルランド語の講義も行われなくなっており、このことから改宗の手段としてアイルランド語を用いることへの国教会の「気乗りのしない態度」がうかがえる。⁽³⁵⁾リチャードソンの提案は当初アイルランド下院議会や総督などの支持を得たもののその実現に向けて実際に行動が取られることはなく、結局リチャードソンが莫大な借金を背負ってこの計画は終了、また年代史家として活動した最後の人物の一人とされるオ・リニーンが貧困のうちに亡くなったことは、ゲール社会の終焉も示すものであった。

ここで重要なのは「強烈に反カトリック」であつたりリチャードソンはアイルランド語をあくまでも改宗のための手段と捉えている点である。当時国教会内で起こったりリチャードソンへの反論も、手段が英語であるべきだとする点において異論を唱えるもので、大規模な改宗を実現するには教育が必要かつ有効であり、それをいかに効率的に行うかを論じている点では一致している。⁽³⁶⁾代表的な反論では「リチャードソン師の善意に満ちた計画」は「まったく無意味」だとし、「あの野蛮な言語を奨励することは彼らと我々を隔てる違いを継続させるだけで」「原住民を改宗させられる唯一の希望である貧しいアイルランドの子供を学校に通わせるための資金が、アイルランド語の本や伝道を広める計画によって失われる」と警告している。⁽³⁷⁾またジョン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) も、「この国でアイルランド語が廃止されるならば、それは崇高な偉業」で「それが半世代の間にわずかな費用で行われなければ裏切られた気持ちになるだろう、というのも年六千ポンドの税金でその偉大な事業は成し遂げられると考えるからだ」としている。⁽³⁸⁾このようにアイルランドのプロテスタント住民は、言語の問題に立ち向かうことが大規模な改宗を目指す場合の中心の問題となることを認識していたものの、この巨大な事業を成功させるだけの手段を見つけることはか

なわず、結局「プロテスタントの教えを英語によって与えるという、よりやりやすい仕事で手を打つ」こととなった。⁽³⁹⁾ こうして発案されたのが「チャーター・スクール」運動である。「チャーター・スクール」では六歳以上の男女が寄宿生活を送って英語の読み書きと農業、紡績などの職業訓練を受け、その後プロテスタント教徒の主人のもとへ奉公に出すことが計画された。したがって成功すれば英語の普及、改宗、さらには産業の活性化をも成し遂げることができ、この運動の支持者たちは「アイルランドの諸悪を是正する手段」としてこの活動を捉えていた。⁽⁴⁰⁾ そしてプロテスタント教徒はこの運動を「熱狂」と「宗教と社会の状況を変える効果的な手段をついに見つけたという確信」を持って迎えたのだ。⁽⁴¹⁾

この「チャーター・スクール」運動はアイルランド国教会の最高位であるアーサー教区大主教の座に当時就いていたヒュー・ボルター (Hugh Boulter, 1671-1742) の主導によって始まった。ボルターは一七三〇年に請願運動を始め、その年のニューカッスル公宛の手紙には「この国の旧教徒の数はあまりに多いので、彼らをあらゆるキリスト教的方法でアイルランド国教会に導くことが、この国でのプロテスタントの利益のために最も必要なこと」であるが、「成人の旧教徒の無知と頑迷さは甚だしく、彼らを改宗さ

せられる希望はあまりないが、もし子供たちに英語とキリスト教の真理を教えるための多くの学校を建てることであれば、これから成長する世代に善を施す希望がある」ので、「私や他の主教の名のもとに、我々が望む勅許状が得られるよう援助してください」ことを望む」と記している。⁽⁴²⁾ そしてこの年スウィフトを含む国教会の聖職者や貴族ら百人以上の署名と共に請願書は提出され、⁽⁴³⁾ 一七三三年にはジョージ二世の勅許状 (Charter) によってこの運動を推進するための団体 Incorporated Society in Dublin for Promoting English Protestant Schools in Ireland の設立が許可されて、このことからこの団体の運営する学校が「チャーター・スクール」と呼ばれることとなった。この勅許状には当時のアイルランドの状況について「ほとんどの地域で旧教徒の数がすべてのプロテスタントの宗派を合わせた数を大幅に上まわって」おり、「これらの愚かな人々を改宗させて文明化し、良きキリスト教徒かつ忠実な臣民にするために取るべき適切な方法は、十分な数のプロテスタント学校を建設・設立して、そこでアイルランド原住民の子供を英語で教育し、真の宗教の基本的な教義を教えること」だとしている。⁽⁴⁴⁾ 最初に述べたダニエル・ハーンとウィリアム・ヘンリーはこの団体の活動に初期から加わっており、特にヘンリーは一七五八年以降「十五人委員会」と呼

ばれたこの団体の意思決定機関の一人として名を連ね、子供の受け入れ方針や奉公先の選択、学校長の任命など、「チャーター・スクール」の運営にかかわる権限を掌握する立場にあった。⁽⁴⁵⁾この団体は設立以降常に五百人前後の国教会の聖職者やプロテスタントの貴族・紳士階級からなる会員数を保ち、学校の運営は団体の会員による寄付金の他、イングランドに住む「通信会員」からの寄付金、さらに議会からの補助金等の公的資金によって主にまかなわれることとなった。⁽⁴⁶⁾翌一七三四年には最初の学校、一七三五年にさらに三校が建設され、この年の団体の議事録には「この最も優れた方策がウィリアム王のアイerland 征服以後数年のうちに行われていれば、アイerland の下層民は今頃良きプロテスタント臣民となっていただろう」としている。⁽⁴⁷⁾

「チャーター・スクール」運動は当初順調に進み、定期的に発行された団体の議事録によればその学校数は一七三〇年代末に十四校、一七四〇年代末に三十四校、一七六三年には四十九校にまで増えている。また各学校には二十人から四十人の子供が寄宿しており、最も多かった一七六〇年代には二千人以上の子供を収容していたと記録されている。ところが一七八〇年代になってイングランドの刑務所改革活動家ジョン・ハワード (John Howard, c.1726-1790) によってその劣悪な実態が明らかにされる。ハワー

ドは一七七九年以降アイerland の刑務所視察を始め、その際いくつかの「チャーター・スクール」を「一七八一年出版の団体の議事録を携えて」訪問している。そしていくつかの学校では生徒数の水増しがあることを指摘し「私の訪ねたほとんどの学校の状況は、プロテスタンティズムの名を汚し、アイerland でカトリック教を助長するほどにひどい」と記している。⁽⁴⁸⁾その後一七八七年から翌年にかけて再びアイerland を訪ねたハワードは一七八九年に再び報告書を出版し、ある学校について「二十六人の女子と五人の男子。建物は修理されておらず、大変不潔でノミだらけ。多くの犬がいて、ベッドの上にもいる……子供たちは汚れていて、半分飢えた状態……多くが疥癬や他の皮膚病を患っており、水場が遠すぎる。……ここでも他のいくつかの学校と同様、学校長の子供は清潔で健康だ」と報告している。⁽⁴⁹⁾ハワードの報告を契機に一七八八年にはアイerland 下院議会に「チャーター・スクール」の運営に関する調査委員会が設けられ、ハワードの他にアイerland の刑務所監督官で医師でもあったサー・ジェレマイア・フィッツパトリック (Sir Jeremiah Fitzpatrick, c.1740-1810) も証言を行っている。元々はカトリック教徒で教育をパリで受けたとされるフィッツパトリックは一七八〇年国教会に改宗しているが、これは財産や職業の保持のための戦略

的なものだったと考えられている。⁽⁵⁰⁾ フィッツパトリックは一七八六年から翌年にかけて二十八校を訪ね「子供たちは病弱で、多くが疥癬ややけどなどを患って」おり、それは質の悪い食事や、紡績の仕事によって健康を損ねるためだとして⁽⁵¹⁾いる。

一八〇一年のイギリスとの併合後は英国下院議会によってアイルランドの教育に関する調査が開始されるが、一八二五年の王任委員会による報告では「チャーター・スクール」を「苛烈さと恐怖の組織」と非難してその失敗を認め、一八三一年に全国統一の初等教育制度が成立したのに伴ってこの運動は終了する。この報告書によれば開始以来この運動のために使われた費用は一六一万二一三八ポンドにのぼり、うち一〇二万七七一五ポンドは議会からの補助金であった。⁽⁵²⁾ その他にも王室からの報奨金等の資金援助も得ており、投入された公的資金の総額は一三〇万ポンド程度だった⁽⁵³⁾と考えられる。また開校以来すべての施設から奉公に出された子供の数は一万二七四五人で、そのうち奉公の期間を終えてプロテスタント教徒と結婚すれば五ポンドをもらえると⁽⁵⁴⁾いう「結婚持参金」を得た者は一一一人に過ぎなかった⁽⁵⁴⁾としている。大規模な改宗の目的が果たされなかったばかりか、学校長が固定給の他に子供の労働から出る利益も収入にできる仕組みが搾取や虐待につながる結果となっ

た。これらの学校で育った子供たちには「汚名が着せられ」⁽⁵⁵⁾「カトリックの大衆文化ではチャーター・スクールは極悪非道の評判」を得たのであった。それはこの頃アイルランドを訪ねた慈善家エドワード・ウェイクフィールド(Edward Wakefield, 1774-1854)の「これらの学校を通り過ぎる時、用心深い目をしながら罵りの言葉や悪態によって心からの苦痛を表さずにいるカトリック教徒はほとんどいない」という報告にも示されている。ウェイクフィールドはこれらの学校が「改宗者ではなく敵を、和解ではなく分裂を作り出し、不和がさらに広がっている」とし、「アイルランドのカトリック教徒をプロテスタントの教えに導き、彼らの心の誤りをすべて消し去ることは重要な目的だが、このやり方で彼らが誤っていたと納得させられるだろうか」とこの運動を批判している。⁽⁵⁶⁾ この時期にはイングラ⁽⁵⁷⁾ンドの福音主義者による改宗運動も活発化し、また一八四五年から数年続いた大飢饉の間にも食事の施しを受ける代わりに改宗を迫る事例があった⁽⁵⁸⁾ことから、アイルランドの貧困層には「彼らの貧しさにつけこもうとする宗教団体への憎しみ」⁽⁵⁹⁾がさらに植えつけられることとなった。

この報告書には「チャーター・スクール」で育った子供十五人の面接調査の様子が残されているが、⁽⁶⁰⁾注目すべきなのは暴力や虐待の実態の他に、ある研究者が指摘するよう

にこれらの調査がすべて英語で行われており、子供たちが英語に不自由している様子のない点である。⁽⁶¹⁾これはこの運動が成功した結果と捉えるべきではなく、この時期には民衆の間でも英語の使用が普及し始めていることを示すものと考えるべきである。後に「カトリック解放の父」と称され自身もアイルランド語の話者であった政治家ダニエル・オコネル (Daniel O'Connell, 1775-1847) もこの頃「アイルランド語はアイルランド人の心に絡みつく多くの思い出とつながっているが、今日の交渉の手段としては英語の実用性のほうが勝っており、アイルランド語が次第に使われなくなっても溜息をつくこともないだろう」と語っている。⁽⁶²⁾さらに大飢饉によってそのほとんどがアイルランド語の話者であった貧困層が死亡し、その後も多くが北米へ移民したことによって英語の優勢は決定的となって、一八九二年には翌年アイルランド語の復興を目指すゲリック・リーグの初代代表となるダグラス・ハイド (Douglas Hyde, 1860-1949) によって「アイルランドを非英国化する必要」⁽⁶³⁾さえ語られるに至る。このゲリック・リーグの影響もあって、一九二二年の独立後はアイルランド語が国語とされ教育の現場でも必修科目となったが、その衰退は止まらなかった。必修科目となったことがむしろ衰退を招いたとの指摘や、貧困やナショナリズムを連想させること、また「公式

標準アイルランド語」が定められたのが一九五八年以降と遅れたことなどが衰退の原因だとの見解もある。⁽⁶⁴⁾興味深いのは、言語の衰退とは逆に大飢饉後のアイルランドではカトリック教への帰依が強まったと考えられて「信仰革命」とも呼べるような現象が起こった点である。⁽⁶⁵⁾したがって「テューダー期の宗教と言語の制圧の方針は十九世紀になって半分実現され」たものの、⁽⁶⁶⁾アイルランド人を改宗させるという目的はついに果たされることがなかったわけである。このことは人々の言語が英語に変わった後もなおカトリックの国であり続けたのはなぜか、というアイルランド史研究にとって重要な問いを投げかけるものである。

註

- (1) 拙稿「ハーン家について思うこと」『へるん』(八雲会編、第四十一号、二〇〇四年) pp.99-101、「ハーン家の由来について」『へるん』(八雲会編、第四十二号、二〇〇五年) pp.114-6、「ラフカディオ・ハーン—アイルランド史の視点から」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(早稲田大学大学院文学研究科編、第五十輯、第四分冊、二〇〇五年) pp.81-9、「父チャールズとクリミア戦争」『へるん』(八雲会編、第四十三号、二〇〇六年) pp.69-71、「ダニエル・ハーンについての新史料」『へるん』(八雲会編、第四十四号、二〇〇七年) pp.91-4.

- (2) 拙稿「ハーン家と『チャーター・スクール』」「へるん」(八雲会誌編、第四十五号、二〇〇八) pp.87-90「ハーン家と十八世紀アイルランドにおける『チャーター・スクール』運動」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(早稲田大学大学院文学研究科編、第五十四輯、第四分冊、二〇〇九年) pp.89-108.
- (c) Marianne Elliott, *The Catholics of Ulster: A History*, New York, Basic Books, 2001 (first published in 2000), p.171-2.
- (4) 28 Henry VIII c.5.
- (5) Nicholas P. Canny, *The Elizabethan Conquest of Ireland: A Pattern Established 1565-76*, Sussex, The Harvester Press, 1976; Nicholas Canny, 'Dominant Minorities: English Settlers in Ireland and Virginia, 1550-1650' in A. C. Hepburn, ed., *Minorities in History*, London, Edward Arnold, 1978, pp.51-69.
- (6) Aidan Clarke, *The Old English in Ireland, 1625-42*, New York, Cornell University Press, 1966; S.J. Connolly, *Divided Kingdom: Ireland 1630-1800*, Oxford, Oxford University Press, 2008, pp.4-5.
- (7) Brian Ó Cuív, 'The Irish Language in the Early Modern Period' in T. W. Moody, F. X. Martin and F. T. Byrne, eds., *A New History of Ireland vol. III, Early Modern Ireland, 1534-1691*, Oxford, Oxford University Press, 1991 (first published in 1976), pp.509-45.
- (8) *Ibid.*, p.509.
- (9) 28 Henry VIII c.15, sec. 9.
- (10) Ó Cuív, *op.cit.*, pp.509-10.
- (11) Patricia Palmer, *Language and Conquest in Early Modern Ireland: English Renaissance literature and Elizabethan imperial expansion*, Cambridge, Cambridge University Press, 2001, p.127; Ó Cuív, *op.cit.*, pp.511-2.
- (12) S. J. Connolly, *Contested Island: Ireland 1460-1630*, Oxford, Oxford University Press, 2007, p.200.
- (13) Samantha A. Meigs, *The Reformations in Ireland: Tradition and Confessionalism, 1400-1690*, London, MacMillan, 1997, p.1.
- (14) Connolly, *Divided*, pp.276-7; Connolly, *Contested*, p.353.
- (15) Nicholas Canny, *The Upstart Earl: A Study of the Social and Mental World of Richard Boyle, first Earl of Cork 1566-1643*, Cambridge, Cambridge University Press, 1982.
- (16) Connolly, *Divided*, p.277.
- (17) Raymond Gillespie, 'The End of an Era: Ulster and the Outbreak of the 1641 Rising' in Ciaran Brady and Raymond Gillespie, eds., *Natives and Newcomers: Essays on the Making of Irish Colonial Society 1534-1641*, Dublin, Irish Academic Press, 1986, pp.191-213 脚。
- (18) Karl S. Bottigheimer, 'English Money and Irish Land:

- the “Adventurers” in the Cromwellian Settlement of Ireland’ in *Journal of British Studies* vol.7, no.1 (November 1967), pp.12-27 註°
- (61) J. G. Simms, *The Williamite Conflagration in Ireland 1690-1703*, London, Faber and Faber, 1956 註°
- (62) T. P. Power and Kevin Whelan, eds., *Endurance and Emergence: Catholics in Ireland in the Eighteenth Century*, Dublin, Irish Academic Press, 1990.
- (63) Ruth Dudley Edwards, *An Atlas of Irish History*, London, Methuen, 1981 (first published in 1973), p.178.
- (64) Thomas P. Power, ‘Converts’, in Power and Whelan, eds., *op cit.*, pp.101-27; Eileen O’Byrne, ed., *The Convert Rolls*, Dublin, Stationary Office, 1981. 親族にカトリック教徒を持つ改宗者は後のカトリック解放運動における重要な役割を果たしたといえる。
- (65) *An Abstract of the Number of Protestant and Popish Families in the Several Counties and Provinces of Ireland*, Dublin, M. Rhanes, 1736, reproduced by The Gale Group for The Eighteenth Century Collections Online (ZIN+ ECCO).
- (66) *A Report Made By His Grace the Lord Primate, From the Lords Committees, Appointed to Enquire into the Present State of Popery in the Kingdom of Ireland*, London, J. Oliver, 1747, ECCO. この調査に関する詳細は拙稿「クーン家と十八世紀」(二〇〇九) pp.94-5.
- (67) Connolly, *Divided*, pp.276-7.
- (68) Giraldus Cambrensis (1188), *The History and Topology of Ireland*, edited by John J. O’Meara, Harmondsworth, Penguin, 1982; Tony Crowley, *War of Words: The Politics of Language in Ireland, 1537-2004*, Oxford, Oxford University Press, 2005, p.3.
- (69) Edmund Spenser, *A View of the State of Ireland*, Dublin, Lawrence Flin, 1763, ECCO, pp.103-4.
- (70) Crowley, *War*, p15.
- (71) Crowley, *War*, p.67.
- (72) Connolly, *Divided*, pp.276-7.
- (73) Karl S. Bottigheimer, ‘The hagiography of William Bedell’ in Tony Barnard, Daibhi Ó Croinin, and Katharine Simms, eds., ‘*A Miracle of Learning*’ *Studies in Manuscripts and Irish Learning*, Aldershot, Ashgate publishing, 1998, pp.201-8.
- (74) R. B. McDowell and D. A. Webb, eds., *Trinity College Dublin, 1592-1952: An Academic History*, Cambridge, Cambridge University Press, 1982, pp.9-10.
- (75) Bottigheimer, ‘The hagiography’, p.202.
- (76) John Richardson, *A Proposal for the Conversion of the Popish Natives of Ireland to the Established religion*, Dublin, E. Waters, 1711, ECCO; *A Short History of the Attempts that have been made to Convert the Popish Natives of Ireland to the Established religion*, London,

- Joseph Downing, 1713, 2nd edition, ECCO.
- (38) Katharine Simms, 'Charles Lynegar, the Ó Luinnín family and the study of Seanchas' in Barnard, Ó Cróinín and Simms, eds., *op.cit.*, pp.266-83, McDowell and Webb, eds., *op.cit.*, p.10.
- (39) Crowley, *War*, pp.68-70.
- (55) Rev. Edward Nicholson, 'Letter to Secretary, Society for Promoting Christian Knowledge, 1715', in Tony Crowley, *The Politics of Language in Ireland 1366-1922: A Sourcebook*, London, Routledge, 2000, p.101.
- (88) Jonathan Swift, 'Answer to several letters sent me from unknown hands, written in the year 1729' in Herbert Davis, ed., *Irish Tracts, 1728-1733*, Oxford, Basil Blackwell, 1971 (4th edition), p.89.
- (93) Connolly, *Divided*, p277.
- (40) M. G. Jones, *The Charity School Movement: A Study of Eighteenth Century Puritanism in Action*, London, Frank Cass and Co., 1964 (first published in 1938), p.235; Joseph Robins, *The Lost Children: A Study of Charity Children in Ireland, 1700-1900*, Dublin, Institute of Public Administration, 1980, p64.
- (41) Connolly, *Religion*, p.305.
- (42) Boulter to the Duke of Newcastle, Dublin, May 7, 1730, in *Letters Written by His Excellency, Hugh Boulter, D. D.*, Oxford, Clarendon, 1769-70, ECCO, vol.2, pp.12-2.
- (43) Jones, *op.cit.*, pp.233-5; Robins, *op.cit.*, p.63; Kenneth Milne, 'The Irish Charter Schools' in *The Irish Journal of Education*, vol.8, no.1, (Summer, 1974), p.13.
- (44) *A Copy of His Majesty's Royal Charter, for Erecting English Protestant Schools in the Kingdom of Ireland*, Dublin, George Grierson, 1733, ECCO.
- (45) 「二人の運動のなかからとり詳細な草稿「一八家十八世紀」(1700年)°」
- (46) Kenneth Milne, *The Irish Charter Schools 1730-1830*, Dublin, Four Courts Press, 1997, p.12; Donald H. Akenson, *The Irish Educational Experiment: The National System of Education in the Nineteenth Century*, London, Routledge & Kegan Paul, 1970.
- (47) *A Brief Account of the Proceedings of the Incorporated Society in Dublin, for Erecting and Promoting English Protestant Schools in Ireland*, London, published by Order of the Society, 1735, ECCO, pp.9-10.
- (48) John Howard, *The State of Prisons in England and Wales*, Warrington, William Eyres, 1784, 3rd edition, ECCO, pp.208-9.
- (49) John Howard, *An Account of the Principal Lazarettos in Europe*, Warrington, William Eyres, 1788, ECCO, pp. 101-24.
- (50) Richard L. Blanco, 'The Soldier's Friend-Sir Jeremiah

- Fitzpatrick, Inspector of Health for Land Force' in *Medical History*, vol.20, no.4 (October, 1976), pp.402-21; Oliver MacDonagh, *The Inspector General. Sir Jeremiah Fitzpatrick and social reform, 1783-1802*, London, Croom Helm, 1981.
- (15) Report on the State of the Protestant Charter Schools of This Kingdom, Monday 14th, April 1788, in *The Journals of the House of Commons, of the Kingdom of Ireland*, Vol.25, Dublin, James King and Abraham Bradley King, ECCO, 1788.
- (16) *First Report of the Commissioners on Education in Ireland*, House of Commons, British Parliamentary Papers, 1825 (400) XII, Appendix No.172, pp.334-7.
- (17) Robins, *op.cit.*, p.99.
- (18) *First Report*, Appendix No.172, pp.334-7.
- (19) Elliott, *op. cit.*, p.172.
- (20) Edward Wakefield, *An Account of Ireland, Statistical and Political*, vol. II, London, Longman, 1812, ECCO, pp.410-9.
- (21) Irene Whelan, *The Bible War in Ireland: The "Second Reformation" and the Polarization of Protestant-Catholic Relations, 1800-1840*, Wisconsin, The University of Wisconsin Press, 2005.
- (22) Irene Whelan, 'The stigma of Souperism' in Cathal Poirteir, ed., *The Great Irish Famine*, Dublin, Mercier Press, 1995, pp.135-54; James S. Donnelly, Jr. *The Great Irish Potato Famine*, Gloucestershire, Sutton Publishing 2001, pp.233-6.
- (23) Jones, *op.cit.*, p.242, Robins, *op.cit.*, pp.99-100.
- (24) *First Report*, Appendix No.80.
- (25) Michael J. Coleman, "'The children are used wretchedly': pupil responses to the Irish charter schools in the early nineteenth century" in *History of Education*, vol. 30, no.4, (July 2001), pp.339-57.
- (26) 'Daniel O'Connell on the Irish Language, 1833', in Crowley, *The Politics* p.153.
- (27) Douglas Hyde, 'The Necessity for De-Anglicising Ireland', 1892, in Crowley, *The Politics*, pp.182-8.
- (28) Adrian Kelly, *Compulsory Irish: Language and Education in Ireland, 1870s-1970s*, Dublin, Irish Academic Press, 2002; Crowley, *War*, 聖。
- (29) Emmet Larkin, 'The Devotional Revolution in Ireland, 1850-75' in *American Historical Review* 77 (1972), pp.625-52, 聖論『宗教史トヘマンハツニ於テノ『聖書革命』トシテ Devotional Revolution』』ニコラト』『西洋史論叢』中澤田大幸西洋史研究会編' 第二十三号' 二〇〇一年' pp.51-62.
- (30) Crowley, *War*, p.111.